



王朝歴史物語の生成と方法

加藤, 静子

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2005-04-27

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙2821

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002821>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 5 】

氏 名・(本 籍)	加藤 静子	(神奈川)
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)	
学 位 記 番 号	博ろ第25号	
学位授与の 要 件	学位規則第5条第2項該当	
学位授与の 日 付	平成17年4月27日	

【 学位論文題目 】

王朝歴史物語の生成と方法

審 査 委 員

主 査 教 授	福長 進
教 授	林原 純生
助教授	田中 康二
助教授	樋口 大祐
教 授	中村 康夫

提出論文は『大鏡』を中心に構成したものであるが、歴史物語の嚆矢『栄花物語』について論考を最初に置いた。一言の断りもしていないが、『大鏡』は、『栄花物語』が切り拓いた歴史の地平から出発し、記事を縦横に利用しながら記している。なぜ、作り物語の展開とは逆に、女性の手になる歴史物語が先行し、ほぼ同時代を扱う男性の手になるものが後になつたのか。当時とても大きかつた性差は、歴史を俯瞰し歴史事象を採り上げる際に、どのような違いとなつて顕れるのか。それらの疑問に一書にすることで答えてみたいという思いがあつた。

ところで、歴史物語研究には特有の難しさがある。歴史物という宿命から、全く無関係な記事が隣り合つて綴られる。あちこち話は飛び、雑多な記事の混合からなる。その上、作者（编者）の手による文章なのか、原資料による文章なのか、腑分けして読むことすら確かな原資料がほとんどない今日、かなり困

難である。だから、文学作品ならはつきり見えてくる、作品の背後でコントロールする表現主体者が、なかなか見えてこない。歴史を構想した作者に迫り、作品の核心に迫るためには、どのような有効な研究方法があるのだろうか、自問し手探りしつつ、以下のような研究となつた。

Ⅰ『栄花物語』歴史語りの位相』では、女性であるがゆえに採られた歴史叙述の手法、及び表現の特性について分析を試みた。

第一章・第二章では、人物提示のしかた、人物呼称について分析を試みた。まず、『枕草子』『紫式部日記』での、その人を敬つて名指ししない所謂敬避表現について検討し、主家やその近い家筋が必ず対象範囲に含まれる結論を得た。『栄花物語』でも、親王・僧侶を除く外すると、道長及び彼の兄弟、道長の子供たち、室倫子・明子の兄弟などに敬避表現がとられていた。編年構造を持つ『栄花物語』の場合は、父兼家以前の人々をほぼ全員、

親王と雖も名指ししており、道長以降の時代とに歴史の遠近感が感じとれるのである。『枕草子』では、『紫式部日記』ほど徹底した敬避表現が見られず、工夫して名前を付しているのは、道長時代に記されたという、やはり執筆時と作中時との時間的遠さが起因したと推測される。

また、『枕草子』『紫式部日記』で「殿」と呼称したら、それぞれ道隆、道長しか指さない。『栄花物語』で「殿」呼称は多くの人

第三章「立后の大慶記事から」で、「立后」宣言のこと、さらに自邸に立后の宣言が下り、三日間行われた「大慶」について、続編では両者を正確に描いているのに対して、正編では大慶を全く理解していないことから、僅かながら作者の位相が計れた。

第四章では、『栄花物語』正編では、「世の人」というものが、女性が預かり知らぬ政治的局面に現れ、世論代表として、九条師輔から道長への流れを、それぞれの場で事象を

物になされるが、道長のみを指す「殿」の御前呼称があつた。巻頭であれ、どのような場面から移動しても使用されている。作者レベルで違和感のない呼称らしい。さらに道長一家には、他家と異なる「〇〇の御前」という呼称が行われていた。この格上げ呼称は、道長一家をあたかも主家と仰ぐような意味用法である。いかにも道長栄華を物語るにふさわしいと言えよう。

そういう呼称を選んだ作者とは？と言うと、

肯定的に定着させる役割を担っていると捉えた。続編、『大鏡』、『源氏物語』には各々の「世の人」へのスタンスがあつた。

第五章は、『栄花物語』には道長の彼岸の栄華をも描くという、もう一つの主題があるが、道長の死と葬送などに釈迦入滅を比喻する壮嚴がなされていたことを述べた。仏教の教えなどを自在に引用しながらの筆致には、道長信仰の實際をかなり深く理解している作者の姿が垣間見られた。

とところで、『大鏡』は、物語冒頭に雲林院の菩提講に詣でたという人物が登場し、講のはじまる前に超高齢の世継や繁樹らが歴史語りをした、それから一部始終を聞いて、今現在まねび報告するかたちで進められる。

「II『大鏡』歴史語りの場と歴史の枠組」

第一章では、その（聞き手）に徹した人物こそが、『大鏡』全体の（語り手）であること、そして、その（語り手）とは女性ではないのか、それが四鏡の共通項なのではないかと解読した。（語り手）が、『源氏物語』や『栄花物語』同様に女性に設定された意味の大きさを汲みとらねばならない。

第二章「『大鏡』歴史の枠組」では、全体の（語り手）が最初に投入され、歴史語りの場そのものを写し出すことで、歴史の枠組を自在に転換させていくことが可能になった様相を摘出し、歴史が帝紀・列伝・雑々物語の三本柱から成ることを述べた。

第三章「道長伝の構成」は、道長伝そのも

のが他に似ぬ独自の構成をとり、世俗の時と法成寺建立後との二部に分かれ、前者はさらに列伝全体の書き分けと相似形であることを指摘した。また、『藤氏物語』を歴史の柱とする従来の説を退け、道長伝の二部の間に挿入されたものとし、道長を起点として、直系の祖先及び天皇の祖父たる祖先とが辿られたものと解いた。

第四章第五章は、「家伝」「本系帳」という一家の歴史を紡ぐ伝統と實際例に触れ、『大鏡』の列伝の構成、顕彰のあり方に適底する性格が見られること、『大鏡』前史として位置づけるべきことを述べた。さらに「家伝」「本系帳」の文章が残る百川伝について考察した。

『大鏡』は、当時の政務や儀礼を十二分に知り尽くした男性官人（もしくは退官した人）の手になる。だが何の手續きを經ずとも面白く読める作品なので、その視点からの解読がかなりないがしろにされてきた。「III『大鏡

の方法」では、描かれた世界を官人の視線を通して解読しようと試みた。

第一章「言約にして事詳か」では、『大鏡』原話とおぼしき故事に、『大鏡』記事を対照して簡潔表現を眺め、さらに『大和物語』と比較して文章表現レベルから眺めた。結果、当時の男性が日常的に行ったであろう抄出、その抄出という方法に練じた者もつ、簡潔でありながら要をえた表現が見事に行われていることを知った。背後のゆたかな説話基盤を想い、記録や饒舌な説話の存在を意識しながら読むことの大切さを知った。その延長上に第二章以下がある。

第二章「逸話の実体と『大鏡』の手法」では、他人の手による文章と『大鏡』の細部の記述とがかなり一致する三逸話について分析し、『大鏡』の逸話形成法をたどった。一例を示すと、劇的に描かれた『大鏡』の小一条院皇太子退位事件は、『小右記』の、道長が公卿たちに経過説明をした記事にほぼ重なる

ことを指摘し、『大鏡』独自の意味付与を腑分けできた。第三章「官人のまなざし」では「一条帝踐祚には、花山帝から新帝へ」「神璽宝剑渡御」の儀が行われておらず、その史実から花山帝出家行の物語は幻視されたと捉え、人の心の機微を描いた場面形成と語り手の心情を分析しながら論じた。第四章「時平伝と天神説話」は、時平伝に描かれた道真物語について、当時の菅公説話と神格化を別の資料を重ねることと再現させながら、読み解き論じたもの。

第五章「道長登場逸話の形成」では、道長が登場する逸話には、書かれた記録類と細部で一致するものがあること、家内の視点が行われていたことを述べた。第六章「なぜ弓の名手なのか」では、道長の権者像を掘り起こした。弓の名手という物語系譜に、釈迦一聖徳太子―道真―道長と連なるのである。

第七章では、内裏・大内裏を背景とする逸話について正確な読みを試みた。第八章は、

逸話をつなぎ、まとめる箇所、Ⅱ編で述べた列伝全体の構成意識と符号するものが見られ、作品の論理が入り込んでいる様相を捉えた。

なまの写本には思いがけないほど大きな情報量がある。諸本研究は、一作品の個別性特殊性に目がいきがちであるが、実は、作品やジャンルを交差させ、時代を縦貫させてこそ収穫も大きいことに気付いた。「Ⅳ『大鏡』」

諸本研究が拓く地平」では、享受のあとが生々しい写本から読みとった成果である。第一章は、『大鏡』の最善本である東松本について考察。卷子本に、朱による抹消符・補入符墨字による訂正が丁寧に加えられている。書写本文・訂正本文を他系統本文と対校すると、訂正の多くが他本による校訂であると判明した。もとの本文は異本系統に近い。東松本は校訂を経て現在の千葉本系統になったのである。校訂箇所という限定された窓からは、裏書分註本・異本系統本文が近く、増補本系

統の内部には異本系統の本文が見られた。第二章では、東松本の校訂が金沢文庫でなされたことを、現蓬左文庫蔵『源氏物語』や金沢文庫本『今鏡』断簡と同じ料紙という従来の指摘に加え、校訂の仕方も同じとすると、『今鏡』裏書三筆のうち一筆が東松本裏書と一致することから確認した。

第三章では、江戸期の本しか残っていない裏書分註本の享受を探った。各系統の裏書の差異を示しつつ、助教中原師安（長年外記職）がさらに裏書を加えていて、その裏書分註本の裏書を『古事談』が利用して本文化していることを指摘した。

第四章では、『大鏡』の成立時期を推定。増補本系統に加注された時期は二段階以上あり、年代推定ができ、さらに古本系統の成立時期を、作品内部の言説、『玄々集』『後拾遺集』引用の有無、Ⅰ編第一章の敬避表現による成果等から推定して、両系統本から挟みこんで成立年代を考えた。

論文審査の結果の要旨

氏 名	加藤 静子
論文題目	王朝歴史物語の生成と方法
要 旨	
<p>本論文は、既発表論文19本、書き下ろし論文3本、あわせて22本を4部に整理・構成している。第I部は『栄花物語』に関する論考から成り、第II部から第IV部は『大鏡』に関する論文でまとめられている。</p> <p>第I部第一・二章は、『栄花物語』の人物呼称の在り様を、実在人物が登場する他の諸作品のそれとの比較を通して明らかにしている。すなわち『栄花物語』において人物を官職名や邸宅名で呼称する〈絶対避称〉が用いられる範囲は、道長および道長の子女、道長室の兄弟、道長の同腹の兄達とその主だった子供達までであることを明確にして、道長を中心とする『栄花物語』の世界の内実と即応することを論証している。また、『栄花物語』における道長の呼称の変遷をあとづけ、「殿」と「殿の御前」の位相差に着眼して、前者を当座の場面性に応じた呼称と見做し、後者を『栄花物語』に一貫する道長に対する作者（語り手）の評価に基づくものであることを指摘し、唯一、道長にのみ用いられる「殿の御前」の呼称から『栄花物語』が道長中心の世界であることを再説する。第I部は、他に、「世の人」と語り手との位相・距離の問題、立后記事、さらには死の記述を扱い、それぞれに別角度から『栄花物語』の世界の内質を照出する。いずれも本文に密着してすべての用例・事象に検討を加えながら手堅く論を進めている。時に退屈さを感じるほどに瑣末な議論を重ねている所も見受けられるが、中庸を心得た、けれんみのない論述は説得的であり、氏の生真面目な研究姿勢は好感が持てる。</p> <p>第II部第一章は、『大鏡』の語りの時空・語り手の性格を分析することによって、その歴史叙述の内質に迫っている。『大鏡』は男性盲人の手に成るといわれているが、作品内部に幾重にも仮構された語り手のもっとも外辺に位置するのが女性であることをはじめ明らかにし、女性を語り手として設定するのが歴史物語通有の特徴であることを論じて、歴史物語全体を見通す視点を提出している。第四章は、系譜史として形作られている『大鏡』大臣列伝が、家伝・本系帳の伝統を受け継ぐものであることを論じる。第II部は『大鏡』研究に新たな地平を切り開く諸論からなり、読み応えがある。</p> <p>第III部は、「言約にして事詳らか」と評される『大鏡』の逸話の背後には様々な資料があって、それらを想定しながら『大鏡』の逸話を読み解くことの重要性をまず説き、六国史・古記録・私撰国史・諸説話集・縁起・勅撰集などを縦横に駆使して『大鏡』の逸話の成立地盤と生成の方法を明らかにしている。『大鏡』が、中国の史書になじみ、政務や儀礼に精通した男性盲人の手になることは通説化しているけれども、作者が男性盲人であるという視点からの『大鏡』読みが深められてきたわけではなかった。加藤氏はかかる視点からの読みを徹底的に行い、その結果得られた成果が興彩を放っている。</p> <p>第IV部は、『大鏡』の諸本に関する論考から成る。第一・二章は、最善本とされる東松本が、元は建久本や池田本などの異本系統に近い本文を有し、ある時期に数度にわたる統一的な本文校訂を経て、千葉本系統の本文へ変わったことを、東松本にその痕跡をとどめる本文校訂の実際を洗い出すことによって実証する、労作である。従前、千葉本系統から池田本系統が成立したとされていたが、実はその逆であることを明らかにし、これまでの本文研究の成果を覆す新見を提示している。また、東松本の校訂作業が、旧尾州家蔵河内本『源氏物語』や金沢文庫蔵『今鏡』のそれと極めて近く、両写本とともにほぼ同じ頃、同じ所でなされたことを指摘し、後嵯峨朝の文</p>	

主査記載
氏名・印

福 長 進

芸復興事業のひとつであった可能性にも言及している。加藤氏が良質の文献学者であることが知られる。第三章は、氏の本文研究の成果を踏まえて、『大鏡』の成立年代について考察する。成立に関する様々な徴証を洗い出すものの、それらが相互に矛盾し合い、確定にまで至っていない憾みがある。

実は、加藤氏は、今日の『大鏡』研究の最高水準が示されている注釈書として高く評価されている『新編日本古典文学全集 大鏡』（小学館、1996年）の校注訳者である。本論文に収載されている多くの論は、注釈作業の中から掘り起こされたさまざまな問題点に対する自身の回答を示すべくものされたものであることは、初出論文一覧から知られる。各論は注釈作業と一体のものであるといえる。したがって論法自体も注釈的性格を帯び、対象をあらゆる角度から捉え、慎重に検討を重ね、おおむね妥当な見解を導いている。内容的には第II部と第IV部が特に優れている。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者、加藤静子氏が博士（文学）の学位を授与されるに足ると判断した。